


連携だより

令和3年

4月号

令和3年4月1日発行

独立行政法人 国立病院機構 
呉医療センター・中国がんセンター
地域医療連携室

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1
TEL 0823-22-3816
FAX 0823-32-3070

URL <https://kure.hosp.go.jp>
E-mail 506-kure-renkei@mail.hosp.go.jp

4月の花 ツツジ

理念 
思いやりのあるやさしい誠実な医療を提供します



今月号のトピックス

- 退任のご挨拶 前地域医療連携部長 副院長 中野 喜久雄…………… 1
- 就任のご挨拶 地域医療連携部長 副院長 高野 弘嗣…………… 2
- 消化器内科紹介「内視鏡治療で飲み込み改善」
消化器内科内視鏡センター長 桑井 寿雄…………… 2
- 院内研究発表会 特別講演 脳神経外科 大西 俊平…………… 3

退任のご挨拶



前地域医療連携部長
副院長
中野 喜久雄

1990年5月に当院へ赴任し今日に至りましたが、その間2015年10月から地域医療連携部長として当院と地域の皆さんとの連携に関わらせて頂きました。地域医療連携は何ととっても各医療施設と当院との顔の見える連携が必要であり、2016年10月に第1回目となる「地域医療連携のつどい」を開催しました。その後2019年10月まで計4回開催させて頂き、ある程度の連携は計れたと思っています。ただ、その際に地域の先生方と直接お話ししたり、アンケート調査をしたりした結果、一般外来の予約制度や救急患者の受け入れ体制等について色々と課題が明らかになってきました。それについて地域医療連携室の職員や関係者で話し合いましたが、十分な解決には至らず、私自身の非力さを痛感し、お詫びする次第です。

今後は、これらの課題を少しでも解決できるように新任の部長へ託したいと思います。長い間、お世話になりました。

就任のご挨拶



地域医療連携部長
副院長
高野 弘嗣

この度令和3年4月1日より、中野喜久雄先生に代わり地域医療連携部長を担当することとなりました。

当院へは平成19年4月に赴任して以降、消化器内科として主に肝臓疾患の診療に携わってきました。当院は呉地域の各連携医療機関の皆様により支えられていると深く認識しております。

COVID-19の影響により直接顔を合わせての連携は困難な状況ではありますが、これまで中野先生が築かれてきた連携医療機関との関係をさらに密にし、風通しがよくなるように尽力させていただきます。

今後とも宜しくお願い致します。



消化器内科紹介 「内視鏡治療で飲み込み改善」



消化器内科内視鏡
センター長
桑井 寿雄

中国新聞 2021年3月3日 水曜日 暮らし 朝刊特集 14ページ

**内視鏡手術で
のみ込み改善**

咽頭食道憩室の内視鏡治療のイメージ

咽頭はくぼり食道の入り口がよくなる

口から内視鏡を入れこの部分をはさみで切除

咽頭食道憩室

食道

気管

声帯

治療前

治療後

「咽頭食道憩室」と呼ばれる咽頭口の筋肉の異常で、食道を通らなかつた食物が、食道の壁に押し出されてできる空間だ。この壁はのみ込みの邪魔をするだけでなく、食物などがたまって嘔吐や感染性肺炎の原因にもなる。

無医葛西町の谷真一（かずま）先生は、2年前から、食べ物でどろどろがつかえる事が続いたという。内臓や耳鳴りなどに通つても、違和感の原因が分からなかつた。約1年後にようやく、大きな病院での画像診断を受けて憩室が判明した。「パンなどばかりのみ込みがなくなつた。想像していたのに、原因が分からず苦しがつた」と振り返る。

昨年10月、呉医療センターで受けたのは、口から内視鏡を入れる治療だ。全身麻酔をして、内視鏡の先端から刃渡り3・5cmの電気をさみを出して、食道の壁を切り開く。袋をなくして食道の通りをよくする。手術時間は30分ほど。術の前後から切開する外科手術に比べ、体へ

呉医療センターが新しい治療

「内視鏡を使えば、負担の小さい治療で生活の質を改善できる」と話す桑井医師（呉市）

食道にできる袋なくす

の数は少ない。「桑さんは普通に食事ができるようになった」と喜ぶ。

この治療法は、英国の医師から技術を学んだ桑井医師が2018年に国内で初めて実施した。昨年7月には厚生労働省の先進医療の承認を受けた。これまで50・80代の男女が人を治療し、いずれも症状がなくなつたり、軽くなったという。再発は少ないという。

咽頭食道憩室が目立つのは60・70代の男性。日本では患者が少ないとされてきたが、国立病院機構の調査で潜在的な患者が多いことが分かってきた。内視鏡（胃カメラ）で検査しても見逃し、「原因不明」が疑くことも少なくない。袋の存在が分かっていても、大がかりな手術を避け、様子を見る人が多かった。

国内では呉医療センターだけが先進医療として治療に取り組むが、複数の病院が参入を検討している。4年以内は初期の治療を受けて、保険適用を目指す方針。今は気管挿管して全身麻酔を使い、入院が必要だが、将来的には鎮静剤を用いた日帰り手術を視野に入れる。

桑井医師はこの病気を消化器内科の医師にもあまり知られておらず、原因が分からないまま、我慢している人もいます。世界標準の治療をぜひ日本でも定着させたい」と話している。

当院の咽頭食道憩室に対する内視鏡的治療が中国新聞朝刊に特集されました。

この治療法は、当院より国内初の成功例を報告し、昨年7月正式に「先進医療」として厚労省より認可されました。現在、当院が唯一の認定施設ですが、慶応大学、新潟大学、福岡大学など複数の施設から参加協力の申し出が来ております。今後は全国から症例を集積し、将来的に保険診療として広く一般化させることを目指しています。比較的稀な疾患ではありますが、疑わしい症例がございましたら、是非ともご紹介をよろしく願いたします。

院内研究発表会 特別講演



脳神経外科
大西 俊平



令和2年3月6日に、第39回院内研究発表会にて特別講演を行いました。私は、脳神経外科診療に従事しながら、脳腫瘍の画像検査や、ゲノム解析、血中バイオマーカーに関する研究に取り組んでおり、講演ではそれらの研究成果を報告しました。

脳腫瘍は、近年、分子遺伝学的な情報の重要になり、脳腫瘍分類が大きく変化しています。脳腫瘍は種類により手術を含めた治療方針が大きく異なるため、術前の放射線学的な診断が欠かせません。私たちは、最新の解析手法を用いて画像情報を分析し、非侵襲的に脳腫瘍を評価・解析する方法を行っており、それらの成果を報告しました。

また、近年、がんゲノム医療が発達し、「がん遺伝子パネル検査」が、一部が保険診療として行われるようになってきました。当院は、広島大学病院をがんゲノム医療拠点病院とし、連携するがんゲノム医療連携病院となっています。本会では、がんパネル検査から治療薬投与に結びついた経験と、これらの治療には多職種連携の重要であることを共有しました。これからも多職種連携を大切にしながら、がん医療に取り組んでいきたいと考えています。

さらに、先進的な取り組みとして、血液で脳腫瘍を診断できる「血中バイオマーカー」の研究に取り組んでいます。脳腫瘍は他のがん種と異なり、有効な血中バイオマーカーは存在しません。この研究が発展することで、血液で脳腫瘍の診断ができるようになり、そこから治療薬の開発にも繋がっていくことを目指しています。当院でも血液・腫瘍検体を採取しながら研究を行っており、これからも研究を続けてまいります。

これからもより良い医療が提供できるように、研究にも力を入れて取り組んでいきたいと思っています。





第39回 院内研究発表会にて



救急外来へのご紹介について

救急車で搬送する患者さんのご紹介は、救命救急センター医師が症状等を直接お伺いさせていただきますので、「救急外来受付」まで電話でご連絡いただきますようお願い申し上げます。

平日 昼間	8:30~17:15	0823-22-3111
土・日および夜間	17:15~8:30	0823-23-1020

〒737-0023 広島県呉市青山町3-1
独立行政法人 国立病院機構
呉医療センター・中国がんセンター

地域医療連携室

中野 喜久雄 清水 洋祐
森下 早苗 折本 陽一
川島 美由紀
TEL: (0823) 22-3816